「そうだ…ねえクリフト」
　期待に瞳を輝かせ、アリーナは言った。
「私、かき氷が食べたいわ」

　この一言が、一途な神官・クリフトを、文字通りの生命の危機に追い込むことになろうとは…
　言ったアリーナも、そして聞いていたクリフトも、その時は想像だにしていなかったのであった。

＊

　互いの存亡を賭けた、人類と魔族との大戦から、幾ばくかの時が流れた世界。

　魔族を率いた、若き悲劇の魔王・デスピサロも…
　そして、人類の希望の象徴であった、雷を操る緑の髪の勇者も…
　今はもう、この世界にはいない。

　そして、残された人類は、彼らの想いを噛みしめながら、ゆっくりとではあったが、かつての営みを再び取り戻しつつあった。

　この物語は、そんな世にあっても、相変わらず自らの想い人に振り回されながら、懸命に、本当に懸命に生きるひとりの青年の、ある意味、結構かわいそうな話である。

極個人的・クリフト応援小説

「神官クリフト、風雪ひとり旅」

（スクウェア・エニックス「ドラゴンクエスト４・導かれし者たち」より）

あさづけ兄貴

＊

じーわ、じーわ、じー…

岩に染み入る、蝉の声。
聞いているだけで、不快指数が上がるようだ。

ここは魔道の都、サントハイム。

比較的高緯度にあり、夏もそれなりに過ごしやすいはずのこの城塞を、しかし今年は、例年になく厳しい猛暑が襲っていた。
澄み切ったコバルトブルーの空の彼方から、灼熱の陽光が、容赦なく照りつける。

時刻は、午前9時。
そして、この時刻にして、この暑さである。
これが昼頃になったら、一体どれだけ暑くなるのか…

「だーっ！暑ーい！」

少女が、爆発した。

「暑い！あついあついあーつーいーっ！」

もちろん、本当に爆発したわけではない。
爆発したのは、彼女の、やり場のない怒りである。

柔らかくカールした栗色の髪を、茶色の細いリボンで、ひとまとめに後ろで結び、
薄い水色の、裾に少しだけフリルの付いた、ノースリーブのワンピースに身を包んだ…

世界中の人たちに親しまれている、黄色の武術着に青いマント姿でなく、こ

んな「夏の部屋着」でも、もちろん中身に代わりはない。

大戦時の「導かれし者」。
エンドール武術大会に弱冠１７歳で優勝した、まさに世界最強の武闘家。
小さな体に無限の近接戦闘能力を秘めた、誇り高き戦姫。
サントハイム王国王女、アリーナである。

「ほらほら姫様、はしたないですよ」
アリーナの自室。
小さなテーブルを挟んで、アリーナの向かいに座った青年が、やんわりとアリーナをたしなめる。

耳元で刈り揃えた、艶のある濃紺の髪。
少し大きめの、生成りのシャツに、グレーのズボン。

こちらもラフな格好であるが、中身は変わらない。

アリーナが最も信頼する男性のひとり。
聖なる力で傷を癒し、敵を戒める、敬虔なる神の僕。
サラン教会本部所属、王室付き神官。
我らがクリフトである。

＊

本日の午前は、クリフトによる神学の講義。
あの大戦の前から…そう、目の前の壁を(文字通り)蹴破って、自由の天地に旅立ったあの日の前から、アリーナに義務づけられていた、教養の時間のひとつであった。

アリーナの目の前には、羊皮紙の束と鉛筆（と言っても、黒鉛を木の細い板で挟んで紐を巻き付けた、素朴なものだが)。
要するに、講義ノートである。

一方のクリフトの目の前には、聖書やら神学書やら、いろいろなメモやら…

様々なものが展開されていた。
　黒板、あるいはホワイトボードというものがないアリーナの自室での講義。
　クリフトは、これらの本やメモを直接アリーナに見せることで、板書の代わりとしていたのである。

「私だから、まだこれくらいで済んでいるんですよ。もし、今のが陛下やブライ様のお耳に入れば、どれほどお嘆きになることか…」

「はいはい、わかったわよ」
　悲しそうな顔で訥々と語るクリフトに、ちょっとふくれ顔で、アリーナは答えた。
「でも、しかたないじゃない。これだけ暑いんだもん、叫びたくもなるわよ」
　手で、ぱたぱたと、顔をあおぐ。

「確かに、この暑さは、尋常じゃないですね」
　クリフトも、苦笑した。

　じーわ、じわじわ、じー…
　蝉の声が、彼女たちの神経を逆撫でする。

「なんか涼しくなる方法、ないかしらね…」

　おちょぼ口と鼻の間に鉛筆を挟み、テーブルについた両肘で顎を支える。
　ブライが見たら、その場で説教確定…そんな行儀悪い格好で、アリーナがつぶやく。

「沐浴でもなさってはいかがですか」
　この様子だと、とても講義にならないと思ったのだろう。
　開いていた聖書や神学書を片づけながら、澄まし顔でクリフトが答える。

「沐浴かぁ…それもいいけど…」
　気の乗らない声のアリーナであったが…

「…そうだ」

　何かを思いついたのであろう。表情に明るさが戻る。

「ねえクリフト」
　テーブルの左へ回ると、ばんっ！とテーブルに手をつき、クリフトに顔を近づけて言う。
「私、かき氷が食べたいわ」

「かき氷…ですか」
　いきなりアップになったアリーナの顔に、少し心拍数を上げながら…クリフトが答える。

「そう、かき氷よ。暑いときにはやっぱりこれよ！」
　さっきの鉛筆を匙代わりに、かき氷をすくい、食べる真似をするアリーナ。
「こうね、冷たいのをサクッと…」

「ふむ」
　顎に手を当て、考え込むこと数瞬。

「分かりました。持ってきましょう」

　クリフトの瞳が、燃えていた。

「へ？」

「少しお時間を頂きます。しばしお待ちを」
　言うと、脱兎のごとく、アリーナの部屋を駆け出すクリフト！

「あ、あの…クリフト？」

＊

我々が住む、この世界においての話であるが。

元来、「夏にかき氷を食べる」などと言うのは、贅沢、それも、それこそ各国の王家ぐらいにしか許されない、いわば「贅沢の極み」であった。

それは、何故か。
理由は簡単。
人類は、つい最近まで、自力で氷を作ることが出来なかったのである。

世界初の大規模工業用製氷機と言われる、アンモニアを用いたカール・フォン・リンデの圧縮製氷機が完成したのが、１８７６年。
この時点で、ようやく一部の特権階級を除いた人類も、真夏に氷を入手することが可能となったのだ。
しかし、この時もまだ、氷屋から氷を買えるようになったのみ。
各個人が自由に氷を作ることが可能になるには、更に後年、家庭用の冷凍冷蔵庫の普及を待たねばならなかったのである。

では、逆に、なぜ特権階級の人々は、そんな真夏に、氷を食べられたのだろうか。

それは神の配剤であろうか。
この地上には、ごくわずかではあるが、一年中溶けない氷を蓄えている場所が存在するのだ。

高山の上である。

一年中、気温が摂氏 0 度を上回らないような、高い山の上。
当然、そこにある雪や氷は、一年中溶けない。
すなわち、いわゆる「万年雪」である。

各国の特権階級の人々は、自国の領土の中にある高山の上から、この万年雪を切り出させ、王城へと運ばせていたのだ。

当然、麓に運べば、氷は溶ける。

王城への運搬は、まさに時間との戦いである。

であるからこそ、かつては、その切り出しや運搬に富を糸目をつけずに注ぎ込める貴族・王族などしか、この禁断の味を知ることが出来なかったのだ。

そして、ここサントハイム王国でも…

＊

「事情は分かるが、神官様、今日はやめといたほうがいいべ」
山小屋のあるじが、困り顔で言う。

ここは、サントハイム大陸随一の山岳地帯。
王城の東。大陸を東西に横切る大山脈の、その西端の麓である。

麓と言っても、それなりに標高がある場所だ。
風は冷涼。夏の今頃は、非常に過ごしやすく思える。

そこに建てられた山小屋。
ここから山に登り、あるいは山脈越えをする者のための、最後の物資補給施設である。

クリフトは、その前に立っていた。

まさに、完全装備であった。
頭には、おなじみ、サントハイムの紋章〈円十字章（クライスクロイツ）〉が描かれた、丈の高い帽子。
体には、これも良く見知った、緑色の僧服…の上に、もう 1 枚、毛皮のポンチョを着込んでいる。
背中には、教会の至宝「奇跡の剣（ヴンダーシュヴェルト）」。先の大戦時に賜ったものだ。
左腕に、先の大戦で手に入れた、対呪文用盾「鏡の盾（ミラーシールド）」。「対呪文用」と言っても、物理的な防御力も高い逸品だ。

懐には、キメラの翼が 1 枚。

２枚持って出たうちの１枚は、ここまでの行程で消費した。
残る１枚は、万年雪を入手した瞬間に使う。これで下山行程を省略できるし、万年雪の輸送時間も短くて済む。

＊

眼前には、細い道が、山の上に向けて続いている。
そう。実は、この山脈には、それを徒歩で超えるための道があったのだ。

この山脈を隔てた南の砂漠にあるバザーには、不定期で、様々な珍品が入荷する。
そんな珍品の数々を、いち早く王城に届けるためのルート。
それこそが、この山脈越えルートであった。

しかしそれは、かねてより、幾多の商人・商隊が挑み、ある者は激しい吹雪や雪崩に倒れ、ある者は高山病で歩みを続けられず…
そうやって、数多くの屍の上に切り拓かれた、まさに命懸けの道であった。
おいそれと、旅に使える道ではない。

砂漠から王城へ行くのには、よほどのことがない限り、東から大回りで向かうのが普通である。

すなわち、山脈沿いに東に、そして山脈が途切れたところで北西へ。
フレノールの南から、湖を回り込むように南西へ進み、テンペを抜け、今度は山脈の北側に沿って西へ進み、王城に至る。

どれほど時間がかかっても、このルートを行くことが一般的であった。
山脈越えルートは、それほどの難道だったのである。

しかし、クリフトは、今、この道を、上ろうとしている。

山脈を越えるためではない。この山頂に、クリフトは行こうとしていたのだ。

この山脈の頂上が、夏でも気温が零度を超えないことを、クリフトは知って

いた。
　そして、それゆえ、この頂上、すなわち山脈越えルートの中間地点は、(命懸けではあるが)人が通れる道沿いに万年雪が存在するという、ある意味「奇跡的」とも言えるスポットとなっていた、そのことも、クリフトは知っていたのである。
　このルートで登頂、頂上の万年雪を麓まで運び、かき氷にする…それが、
クリフトの狙いであったのだ。

＊

「風と雲の流れが悪い。きっと上は嵐に違いないべさ」
　浅黒く雪焼けしたあるじの、心配そうな表情。

　しかし、クリフトは、柔和な微笑みを返し、答える。
「ご忠告は感謝いたします。しかし、これも王家に使える者の務め…
　私は行かねばなりません」
　どうやらクリフトは、アリーナのかき氷のために、命を捨てる覚悟をしたようだ。
　その心意気、天晴れの一言である。…余人に理解されうるか否かは別として。

「まあ、ならば止めんけんど…くれぐれも、無理はなさらんでな」
　ひとつため息をついた後、もう面倒見切れん、とでも言いたげな口調で、あるじは言った。

「ありがとうございます」
　クリフトは、あるじの方を見ずに、答えた。
　彼が見つめるのは、遙か上方、天空にそびえる、山脈の頂。

(あそこに、私の目指す、かき氷がある…)
　既に、思考が間違っている。
(姫様、もう少しご辛抱下さい…必ず、美味しいかき氷をお持ちいたします！)

　こうして、クリフトは、極寒の山脈へと、歩を進めたのであった。

＊

「雪が…混じってきたな」

　死の山脈越えルート、その中腹。

　帽子を取り、代わりにポンチョのフードをかぶり、なおも行軍を続けるクリフトの、その頬に当たる風に、何かが突き刺さるような、鋭い冷たさが混じる。

　クリフトの言う通り、風の中に雪が混じり始めたのだ。
　このルートの最大の障害、そのひとつ。吹雪である。

　冷気に強い毛皮のポンチョを着込んでいても、寒さが骨身にしみてくる。
　通常の旅人であれば、音を上げかねない寒さ。

　だが、クリフトは挫けない。
　クリフトには、アリーナへの想いと、そして何より、神の力がついている！

　右掌を天に掲げ、呪文を唱える！
「フバーハ！」
　クリフトの体を、淡い光が包む。
　それと同時に、彼の頬に当たる風が和らいだ。

　フバーハ。
　聖なる力で、使用者を含む対象者の体表に、外界の温度変化を和らげる薄い光の幕を作り出す呪文。
　本来は、モンスターの吐き出す炎や吹雪などの攻撃を軽減するために用いられるものだが、そのような「作り出された吹雪」を止める呪文が、「普通の吹雪」相手に効かぬはずはない。
　クリフトの歩みは、吹雪ごときでは止められないのだ。

　そう、吹雪ごときでは止められないのだが…

＊

ザクッ、ザクッ…
規則的なリズムで音を立てながら、黙々と歩くクリフト。

足元には、雪が積もっている。
もはや、土は見えない。

一年中溶けない万年雪なのか、今降った雪なのかは、分からない。
しかし、いずれにせよ、地表に見えている雪は、空気中の塵を吸っている。つまり汚い。
必然的に、食用には適さない。
だから、この雪は持って帰らない。

持って帰るのは、雪の層のさらに下に眠る、氷塊となった圧雪。
時間をかけて、純粋な結晶と化した氷だ。

＊

吹雪は少しずつ勢いを弱め、今はほぼ、無風の状態である。
厚い雲の隙間から、少しだけ、陽光が漏れる。

山の中腹に、棚のように、傾斜のなだらかな、開けた広場のような場所がある。
クリフトは、そこに差し掛かっていた。

一面が白い、広場のただ中。

存在するのは、己のみ。
風が止んでしまえば、そこはもう静寂の世界。

…の、はずであった。

だが…
クリフトの耳は、静寂の中の、かすかな異音を聞き逃さなかった！

ごごごごごごご…

地鳴りのような。
大河の激流のような。

ごごごごごごごごごご…

少しずつ少しずつ大きくなる、その音が何であるか。
クリフトがそれを理解したのは、その双眸が、ある物を捉えた瞬間であった。

頂上の方に、霧、いや、雲のような物が見えたのである。
雪の斜面が、音を立てて、霧のような物を発している。

それに気づいた瞬間、クリフトの全身が硬直した！

「雪崩っ！？」

その通り。
山頂に近い雪が、何かの拍子に崩れたのである。
それは奔流となり、凄まじい勢いで、斜面を駆け下りていたのだ！

「まずい！」

雪崩がこのまま降りてくれば、クリフトの立っている場所を、確実に巻き込む。
そうなれば、彼の命の保証はない！

横に逃げるには、雪崩の幅が広すぎる。

ならば最終手段。キメラの翼で脱出するか？
しかし、クリフトは…

（せっかくここまで来たのに…このまま帰っては、姫様のご期待に添うことが出来ない！）

逃げなかった！
迫り来る雪崩に、立ち向かう決意を固めたのだ！

…なんというか、本当に、頭が下がる忠誠心である。

＊

ザクッ、ザクッ。
雪の中に深く、両足を突き入れる。
足場を固定するためだ。

左腕の「鏡の盾（ミラーシールド）」を、体の前に掲げる。

クリフトは、先の大戦時の旅を、思い出していた。

彼は、旅に出る前から、教会で、基本的な剣の訓練を受けていた。
しかし、それだけでは、長い旅の間、襲い来る敵から身を守ることは、叶わないかも知れない。

そこで、旅のさなか、クリフトと、共に旅した「勇者」、そして大商人トルネコの３名を対象に、「特別剣術講習」が開かれていたのである。
講師はもちろん、武器戦闘のプロフェッショナル、バトランドの王宮戦士（パレスウォリアー）・ライアンである。

世界最高峰の剣技を、直接習えるこの講習。
ライアン本人並みとは行かないまでも、３人の剣技は、それぞれ、この講習によって、磨かれ、鍛えられていった。
そして、かつて門外不出とさえ言われた、王宮戦士（パレスウォリアー）の戦闘スキルの数々もまた、このときに彼らに伝えられていたのである。

仲間との絆、その思い出…
それが、まさに、今のクリフトを支えていたのだ。

＊

雪崩は、ますます速度を上げ、クリフトに迫り来る。
視界に次第に大写しとなって行く、すべてを圧殺する白銀の激流！

その切っ先が、クリフトに届かんとする、その瞬間…

叫んだ！

「大　防　御（グランドディフェンス）ッ！！」

同時に、雪崩の圧倒的大質量が、クリフトを呑み込んだ…

否！

雪崩の中から立ち上る、橙色（オレンジ）の光！
そして、その源は、クリフトの「鏡の盾（ミラーシールド）」！

健在！
クリフトは健在！

クリフトの盾を中心に、全身が発する橙色（オレンジ）の光が、天を衝く！
そして、その光を、いや、クリフトを避けるように、雪崩が彼を中心に、きれいに左右に分かたれていた！

「大　防　御（グランドディフェンス）」。
バトランドの王宮戦士団（パレスウォリアーズ）に伝わる、絶対的防御スキルである。

「国王を守護する」という使命を持つ彼らにとって、防御力の確保は最重要事項である。
その目的を達するため、彼らは、自らの闘気を盾より放射し、防御壁とすることを考え、この技を編み出したのである。
「仁王立ち（ドロウフルハイト）」「身代わり（サクリファイス）」などの他者を庇うスキルと並び、王宮戦士団のアイデ

ンティティとも言うべき、強力な技であった。
　そして、この技と、この技に込められた王宮戦士団(パレスウォリアーズ)の想いは、王宮戦士(パレスウォリアー)ライアンの手によって、確実に、この神官にも受け継がれていたのである。

「ぐううっ…！」
　歯を食いしばるクリフト。
　橙色(オレンジ)の光が、わずかに揺らぐ。

　みしっ、みしっ…
　堅牢な「鏡の盾(ミラーシールド)」すら、悲鳴を上げる氷雪の圧力！

　暴虐なるプレッシャーに、必死に耐える！

　そして、やがて…

　どどどどどど…

　ずずずずずずず…

　ずずずず…

　ずず…　ず…

　雪の奔流は、その運動エネルギーを解放し終え、静止した。
　雪崩は、ただの雪に戻ったのだ。

＊

　橙色(オレンジ)の光が、弱まり、収束する。
　クリフトが、「大　防　御(グランドディフェンス)」を解除したのだ。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

息が荒い。
相当の消耗があるのだろう。

が。

クリフトは、逃げなかった！
クリフトは耐えた！
耐え切った！

主君（アリーナ）の、笑顔のために。
ただ一杯の、ただ一杯のかき氷のために。
男は命を賭けた。
命を賭けて、困難に立ち向かい、勝利したのだ！

「危なかった…」
額の汗を、手で拭うクリフト。
「だいぶロスしたな。先を急がなければ…！」

と言って、再び頂上を見やるクリフトであったが…

「あ、あれは！！」

＊

クリフトの見た物。
それは…

氷。

そう、自分に向けて猛スピードで転がってくる、大きな氷塊であった！

大きいとはいえ、雪崩と違い、よけられないサイズではない。

そう判断したクリフトは、横っ飛びにその場を離れようとしたのだが…

「しまった、足が！」

そうなのだ。
先ほどの「大防御（グランドディフェンス）」の際、体を固定するため、雪中深くに突き入れた足。
もちろん、頑張れば抜けないことはないが、氷塊のスピードから計算して、足を抜いている時間がない。

再びの「大防御（グランドディフェンス）」か？
いや、それも出来れば避けたい。
先ほどの「持続的なある程度の防御力上昇」とは違い、一瞬の爆発的な防御力を要求されるシチュエーションだ。
クリフトには、それに成功する自信がなかった。

だが、希望が潰えたわけではなかった。
この状況においてなお、この危機を切り抜ける秘策が、クリフトにはあったのである。

「神よ…」

言いながら、背負った鞘から引き抜いたそれは…

黄金に輝く刀身。
聖なる十字を模した鍔（キヨン）。
幅広く打ち出された刃（ブレイド）の先端近くに埋め込まれた、天空の蒼の宝玉（ジユエル）。

そう。サントハイム教会に古より伝えられる、使い手の傷を癒やす秘剣。
教会の至宝、天与の兵装（ディヴァインウェポン）「奇跡の剣（ヴンダーシュヴェルト）」！

再び、祈るように、クリフトが叫んだ！

「我に力を！」

ポゥ…
「奇跡の剣（ヴンダーシュヴェルト）」の刀身が、淡い水色の光を放つ。
神の力が、解放される！

こうして、クリフトにとって、本日最大の戦いが幕を開けた！

＊

『天と…』

そこから、ゆっくりと振り下ろすように、下へ。

『地…』

左へ。

『神と…』

ゆっくりと、横に薙ぐように、右へ。

『人との交わりによりて』

常に口にされる、教会の聖句。

刀身から溢れ出した水色の光が、十字の軌跡を描き出す。

両手で、剣を構える！

『天の力、聖なる十字…』

空中に残った十字の軌跡を、同じ水色の光の円が囲む。
それはまさに、サントハイムの紋章（メダリオン）、人と神の調和の印〈円十字章（クライスクロイツ）〉！
そして、その光の円を囲むように、次々と神聖文字（ルーン）が浮かび、光の魔法陣を形成した！

剣が纏う水色の光が、燃える炎のごとく揺らめく！

『神よ、大いなる威光をもって、我が敵を戒めたまえ！』

氷塊は、もはや目前！
巨大な質量を前に…

「うおおおおおっ！」
クリフトが吠えた！
「グランド…」
剣を上段から、一気に振り下ろす！
「クロスッ！！」
そのまま、左から右に薙ぐ！

シュバアアアッ！

剣先から放たれた水色の光が、十字を描き、氷塊に向けて飛翔する！
荘厳なる光の十字は、神の力そのもの。恐るべき破壊力を秘めた、光の刃なのだ！

光は氷塊に衝突し…
ズバァッ！
見事に、文字通り、氷塊を四等分した！

等分された氷塊が、弾み、クリフトの左右を通り過ぎてゆく。
もはや球ではないそれらは、急激にその速度を落とし、程なく、その運動を終えた。

光はそのまま、目前の山、その雪中に吸い込まれていった。

神の力そのものを刃と化し、目前の敵を切断する。
通常の攻撃力も、今ご覧に入れた通り。さらに敵が、幽霊、死体など、いわゆる不死系（アンデッド）モンスターであった場合、その攻撃力はさらに増す。

大いなる、神罰と浄化の剣。

これこそが、教会に伝わる神官剣、その究極にして最大の奥義。
その名を「グランドクロス」！

＊

がくっ！
クリフトが膝を落とす。
「ふぅぅ…」
長い、息をつく。

大　防　御（グランドディフェンス）、そしてグランドクロス。
大技二連発である。
本来ならば、再び立つ気力すら湧かぬに違いない。

が、クリフトは立った。
立ち上がった。
万年雪を手に入れるため、今ここで立ち止まるわけにはいかなかったのだ。

いや…

「…待てよ」

クリフトが何かに気づいたようだ。
急いで、地面の雪から足を引き抜くと、先ほど砕いた氷塊、その一つに走り寄る。
その断面を見て、彼の表情が和らいだ。
「やはり…思った通りだ」

表面のごつごつとした結晶とは異なり、その断面には、恐ろしく肌理が細かく、そして限りなく透明な氷が、顔を覗かせていたのである。

　雪崩が起きたあとに、転がってきた氷塊。
　それはつまり、雪がある程度崩れ去ったあとに、その下に埋まっていた物に他ならない。
　そして、雪の下の氷、それはまさに、クリフトの探し求めていた「時間をかけて圧縮した氷雪」そのものであったのだ。

　彼は、頂上に行かずして、目的を達成したことになる。
　クリフトの勇気と神の力が、思わぬ勝利を、彼にもたらしたのだ。

「神よ…感謝いたします」
　指を組み、神に祈りを捧げるクリフト。
「では、さっそくこれを…」

　そう言いかけて、クリフトの耳が、またもや、異音を捉えた。

　ごごごごごごごごごご…

　先ほどの雪崩の時と、同じ音。
「！！」
　驚いて顔を上げたクリフトが見たものは…

　まるで、彼の目前で発生したかのごとく、すぐ間近に迫った、雪崩の激流だった！
　しかも、今度のは大きい。先ほどの比ではない！

「あ、あわわわわ…」
　クリフトは、素早く氷塊のひとつを抱え上げると、懐からキメラの翼を掴み出した。
「王城へ！」
　言いながら、空へ放り投げる！

　上空に開いた「空間の穴（ワームホール）」がクリフトの体を吸い込んだ、まさにその直後、雪崩がクリフトのいた場所を、丸ごと呑み込んだ…。

＊

「あんれ、また雪崩だべ」

　麓の山小屋。
　あるじが、手を目の上にかざし、頂上を見上げながら、言う。
　この距離から、山で何が起きているか分かるらしい。さすがに年期が違う。

「今日だけで二発目…ほんに不安定だなあ」
　言ってから、また、悲しそうな顔をする。
「あの神官様、大丈夫なんかなあ」

＊

　クリフトは、気がついていただろうか。
　二発目の雪崩の原因に。

　山において、大きな音、物理的な衝撃などは、それが何であれ、雪崩の原因になりうる。
　ましてや、もし、雪の中に、グランドクロスの光の刃なんぞを打ち込む狼藉者がいたとしたならば…

　彼は気がついていただろうか。二発目の雪崩の原因が、彼自身であることに。
　…気がつかない方が、幸せかもしれない。

＊

　どすっ！

　サントハイム城、その前庭。
　そこに、クリフトは、持ち帰った氷塊と共に、落ちてきた。

「いてて…遅くなりました。ただいま戻りまし…」

尻餅をついた、その尻をさすりつつ、言いかけたクリフトの目が、彼の目の前のアリーナを見て、点になった。

城を出るときと同じ、薄い水色のワンピース。
手に、何か持っていた。

涼しげなクリスタルの小鉢に、こんもりと盛られた、白く細かい…
上に、春に採った苺を砂糖で煮たものが、たっぷりと掛かった…

そう、それは、まごう事なき、かき氷であった。

「クリフト…？」
アリーナのきょとんとした顔に、次第に、怒りが浮かぶ。
「ちょっと、今までどこ行ってたのよ！」

「いえ、あの…」
点の目をしたまま、クリフトは言った。
「それより姫様、持ってらっしゃる、それ…」
「それ？」
クリフトの目線の先が、右手に持ったかき氷であることを確かめると、不機嫌そうに答える。
「せっかく一緒に食べようと思ったのに、いなくなっちゃうんだもん。先に食べてたわよ」
「いや、先に食べてたわよも何も、姫様、どうやって氷を…」

ありえない。
努力と苦労、そして幸運も重なって、彼は、予想以上の短時間で、山脈の万年雪を採ってきたはずなのだ。
なのになぜ、眼前の少女は、普通に、かき氷を食べているのだ？
この氷を、彼女は、いったいどうやって、クリフトより速く手に入れたのだ？

「ああ、氷？　どうやって、って言われても…」
ほんの少し、機嫌の直った表情で、アリーナは、彼女の右に視線を投げかけた。

「ああやって」

「ああやって…って、えええええっ！？」

その光景を、おそらく、クリフトは一生忘れないだろう。

老人がいた。

禿げ上がった頭の中央と、残った左右の白髪を逆立てた、独特の髪型（ヘアスタイル）。
長く伸びた、口髭と顎髭。
鋭い眼光。

クリフトと、毎日顔を合わせている人物である。

サントハイム王家の知恵袋。
アリーナ、クリフトと並び、かつての大戦時の「導かれし者」のひとり。
そして、高度な冷凍呪文を自在に操る、凄腕の魔道師。
ブライである。

ブライの前に、桶があった。
何の変哲もない、木の桶である。
桶には、水が張ってあった。

「ヒャド」

桶を指さしながら、重々しい声で、ブライが言う。

彼の指先に、青い光が生まれる。
それは、透明な光の矢となり…
ブライの指先を離れ、木の桶に飛び込んだ。

ピキィィン！
ヒャドの冷気で、桶の水が凍り付く！

「まったく…」
　手にしたアイスピックで、桶の氷をがしがし突きながら、ブライが愚痴る。
「儂の呪文は、このようなことに使う物ではないと、あれほど申しましたじゃろうに」
「だってほら、まともにかき氷とか食べようとか思ったら、山の万年雪を採ってこなければならないのよ？
　どれだけ手間と時間が掛かるか…」

　まさに今、命を賭してその難題を遂行し終えたばかりの、忠実な王室付き神官は…
　残念ながら、その言葉を聞いていなかった。

　目が点になったまま、微動だにしない。

　命懸けで手に入れた氷が、目の前で、いとも簡単に生成されてゆく。
　その光景を見て、あまりのショックに、意識が飛んでいたのだ。

「ね、クリフトもそう思うでしょ…って、聞いてる、クリフト？」
「なんぞ、気を失っておるようですな」

　言ったブライが、クリフトの傍らに目をやると…
（ほう）
　ブライの目を捉えた物があった。
　あの氷塊である。

（こいつを取りに行っておったわけか。しかも一人で）
　ブライは、クリフトが今まで何をしていたか、瞬時に理解した。
　心の中で、ため息をつく。
（まったく…かき氷一杯に命を懸ける阿呆がどこにおる）

　ここにいるのである。

＊

山脈で、大きな雪崩が、二度立て続けに発生した。
そのニュースは、すぐに王城にももたらされた。
幸い、死傷者は出なかったようだ。何よりである。

＊

がばっ！
クリフトが、ベッドから飛び起きた。

「よかったぁ…クリフト、目が覚めたのね」

「？」

ベッドの傍らの椅子に、アリーナが座っていた。
安堵の表情。

「…」
状況が飲み込めぬまま、自分の体に目を落すクリフト。
教会お仕着せの寝間着を着ていた。

状況が飲み込めるまで、しばらく、時間を要した。

ここは、王城内の自室であるらしいこと。
どうやら、王城の前で気絶してしまったらしいこと。
恐らく、誰かがここに自分を運び、着替えさせてくれたらしいこと。

自分はなぜ、気絶していたのか。
確か、ブライが、桶の水から氷を作って…

「！」
クリフトの記憶の糸が、つながった！
「そうだ姫様！ 氷は？」

「ふふ」

　微笑むと、アリーナは、机の上のガラスの鉢を手に取った。
「はい、これが最後」
　両手に持った鉢を、クリフトに差し出す。
「ちょっと溶けちゃったけど、クリフトと一緒に食べたかったから」

「姫様…」
「ベッドに、座っていい？」
「あ、ど、どうぞ」
　聞かれて、慌てて、伸ばしていた足を曲げ、スペースを作る。

「んじゃ」
　ちょこんと、クリフトのベッドに座るアリーナ。
　かき氷を、匙ですくう。
「はいクリフト、食べさせてあげる。あーんして」

「えっ！？」
　心臓が口から飛び出して、屋根を突き破って空へ飛んでいくのではないか、と思えるほど、クリフトは驚いた。
　思わず、声が裏返る。

「…なに大げさにびっくりしてるのよ」
「い、いえ…」
　まさか、こんなシチュエーションが、いきなりやって来ようとは…
　クリフトの心の準備が、出来ていなかったのである。

「でも、いいんですか、本当に？」
「さ、サービスよサービス。ちょっとした…」

　と言って、うつむく。

「ブライに言われたの。
　クリフトが命懸けで取ってきた氷だから、心して食べろ、って。
　自分のために命を懸ける者がいることを、決して忘れるな、って…」

「ブライ様が…」

　ブライは、実にいいことを言う。

「万年雪を取りに行ってたんだね…。
　ごめんね、私があのとき、かき氷が食べたい、なんて言ったから…」
　泣き出しそうなアリーナに、クリフトは笑顔で答える。
「いいんですよ、姫様」
「え？」
「姫様のためならば、この命、いつでも捧げましょう。これからもずっと」

　アリーナだけが知っている、クリフトの笑顔。
　最高の微笑みだった。

「うん、ありがと」
　アリーナも、微笑みを返す。

「それじゃはい、あーんして」
　あーん。
　ぱくっ！
「どう？　レモンのマーマレードをかけてみたんだけど」
「これは！…美味しいですよ姫様！」

　確かに、美味しかった。
　溶けかけてはいたが、ミネラル分を豊富に含んだ、そして締まった氷の粒。
　ブライの呪文で水を凍らせても、この味は出せないだろう。

「よかった、そう言ってくれて」
　アリーナが、再び微笑む。

＊

　そう。
　こんな幸せが味わえるならば、命ぐらい、いくらでも賭けてやるさ。

この時、本当に、クリフトはそう思っていた。

きっと、彼の人生には、こんな事件が、数限りなく起こるのであろう。
そしてその度に、彼は、彼の美しい主君（プリンセス）のために、その命を賭けるのだろう。

それはそれで、幸せなことなのだと思う。
…たぶん、彼にとっては。

＊

神官クリフト。
彼の一生に、幸あらんことを。

そして、出来れば、その一生が、雪崩に巻き込まれそうになったり、氷塊に潰されかけたり、そんなことがあんまり無い一生であると良いなあと、そう心より願う筆者であった。

（おしまい）